



月報

No. 431
2016年
4月

日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目34-35

<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『あなたはわたしの魂を陰府に見捨てられない』

(イースター礼拝)

小河信一 牧師

ヨハネによる福音書 20章1節～10節

¹ 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。² そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」³ そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。⁴ 二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。⁵ 身をかがめて中をのぞくと、が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。⁶ 続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。⁷ イエスの頭を包んでいたいは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。⁸ それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。⁹ イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。¹⁰ それから、この弟子たちは家に帰って行った。

♪ 「丘の上の教会へ のぼる石だたみ

春は桜のはなびら 手のひらにうけてのぼる」 讚美歌Ⅱ－189番

教会の庭の桜が花開くと共に、私たちは復活祭を迎えました。

詩編16:10-11は、まっすぐにキリストの復活を指し示しています。

詩編16:10――

あなたはわたしの魂をに渡すことなく

あなたの慈しみに生きる者にを見させず

カルヴァンは、この節の「墓穴」は（りちること）を表す語であると言って、「たとえ、キリストの身体は死すとも、腐朽には屈することがないので、キリストの生命は墓の支配から自由である、ということである」と、キリスト預言として解釈しています。

詩編16:11――

命の道を教えてください。

わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い

右の御手から永遠の喜びをいただきます。

墓が空っぽであったのは、神の「右の御手」が働いて、キリストがよみがえらされたからです。そして、私たちは「右の御手から永遠の喜びをいただき」、エマオ途上の旅人たちのように、死の陰の谷を巡り、今や「命の道」を進む者となりました。

同時に、空の墓の出来事において、「御顔（神の顔）を仰いで満ち足り、喜び祝う」ということも実現しました。すなわち、マグダラのマリアは、置き去りにされた「亜麻布」や丸められた「覆い」という状況証拠を目で見て確認すると共に、「後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた」（ヨハネ20:14）のです。

キリストを信じる者が、親しく復活の主を仰ぐことは、未だ恐怖や不安のめやらぬ、墓場から始まっています。私たちが、死と罪に取りまかれながらも、「命」の源である神にし（＝御顔を仰いで）礼拝することが、大切だと教えられます。

本日の説教題は、詩編16:10前半に即して『あなたはわたしの魂をに見捨てられない』と付けました。というのは、「（陰府に）渡すことなく」は「（陰府に）見捨てることなく」が原意だからです。

陰府にまで落とされるような死の恐怖との連関で、神から「見捨てられる」という用語から、すぐに思い起こされるのは、十字架上の主イエスの次の言葉でしょう。

マタイ福音書27:46――

三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」

これは、「わが神、わが神、なぜ（あなたは）わたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

一方、主イエスは、十字架の死を遂げられ、に渡されました。他方、私たちは、詩編16:10の預言「に渡すことなく」のように、神の怒りの裁きである十字架の死をこうむることはありませんでした。数々の罪科のゆえに死すべき私たちに代わって、主イエスが死んでくださったのです。

使徒信条では、陰府に渡された主イエス・キリストのことが、「十字架につけられ、死にてられ、陰府にくだり」と明示されています。

ただし、「わが神、わが神、なぜ（あなたは）わたしをお見捨てになったのですか」という主イエスの叫びに立ち返って言うならば、次のように理解できます。つまり、父なる神が御子を「見捨てられた」

で、事が終わらずに、「三日目に死人のうちよりよみがえり」（使徒信条の続き）という救いの御業に至っています。従って、主イエスが、死にて葬られたこと、「見捨てられた」ことは真実ですが、その絶望の極致において、神はそこ（「墓穴」「腐朽」）から救い出すという奇しき御業を成し遂げてくださったのです。

キリストの復活を指し示す詩編16:10-11にわれ、それでは、ヨハネ福音書の復活の御言葉を読みましよう。

ヨハネ福音書20:1——

週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

ヨハネ福音書の復活の記事においては、主イエスにつき従っていた女たちの中で、「マグダラのマリア」一人に焦点がられています（比較：マタイ28:1 二人の女 / マルコ16:1 三人の女 / ルカ23:56-24:1 何人かの婦人たち）。

A. シュラッターの注解——

復活の主の最初の行為は、その死体もろともイエスご自身が全く見えなくなり、消えてしまったことで、慰めもなく、墓の所で泣いていた（ヨハネ20:11）一人の女を慰めることであった。

神は、一人の女の魂に平安が与えられるように、よみがえりの命のもとに彼女を招かれました。神は、この世における弱い者、愚かなとみなされている人を選ばれたのです（I コリント1:27）。そして、マグダラのマリアは、見たままの真実を、ペトロたちに証しし伝えました。

神が最初にマリアに見させられた光景、「墓から石が取りのけてある」は、主のよみがえりの出来事が、いったい如何なるものであるか、をよく物語っています。

誰か人が「墓から石が取りのけた」ではありません。見えない力、上よりの力、すなわち、神の御力によって「墓から石が取りのけられてしまった」（受身・完了）のです。

この上よりの力、神の御力は、中心的な出来事である主イエスの復活において、まさしく発揮されました。

マルコ福音書16:6 天使（若者）の御告げ——

「あの方はよみがえられました。ここにはおられません。」（口語訳）

「主はよみがえらされた！ **he has been raised !**」との言葉の通り、人間をすべての罪から救う御業が、ここに起こされました。このことは、「私が信じる」というよりも、「神が私に信ぜしめられる」（神が私に信仰を与えられる）という教会の告白の姿勢に通じています。

「私が…私が…」という高慢さから隔てられた、一人の女が、空の墓において神が為されたすべての出来事を目撃し、福音の中心である「主はよみがえらされた！」ことを受け入れたことは、幸いなことでした。それは言い換えれば、私が衰え、死に向かって行く中に、神の「右の御手」によって、「永遠の喜び」、永遠の命が、私に授けられたということです。

ヨハネ福音書20:5-7——

⁵ 身をかがめて中をのぞくと、が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。⁶ 続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。⁷ イエスの頭を包んでいたのは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。

マリアに墓が空っぽだと告げられて、ペトロたち二人は、置き去りにされた「亜麻布」や丸められた「覆い」という、主の復活に関わる状況証拠を確認しました。

もし、死体を盗み出そうとしたならば（参照：マタイ28:13）、急いで、死体をそのままそっくり運ん

だことでしょう。わざわざ死体を包んでいた亜麻布や覆いをがすようなことはしないはずで。

キリストの復活は、天の父の御心がこの地上にあらわされたものですが、それは単なる幻ではありません。神の御手が加わったという点で、何らかの形が地上に刻まれます。それが、丁寧に解きほどいて置かれた亜麻布と覆いなのです。

ヨハネ福音書20:8-9――

⁸ それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。⁹ イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。

ペトロたち二人が、空の墓とキリストの復活を受け止めたことが、「見て、信じた」、そして、「聖書の言葉を、まだ理解していなかった」と続いて説明されています。ここで、「信じた」にもかかわらず、どうして「まだ理解していなかった」と、相反するようなことを言っているのか、と疑問がわきます。

まず、人が「見て、信じた」というのは、身も魂も、キリストの十字架と復活という大いなる救いによって支配されてしまった人の様子を物語っているのではないのでしょうか。一口に言えば、神の啓示によって、打たれた人の姿がそこに在るということでしょう。

しかし、なぜ、「聖書の言葉を、まだ理解していなかった」と付け加えているのでしょうか。

このように記されているのは、主の復活を、聖霊の導きにより、「理解する」ことの重要性を私たちに知らせているのではないのでしょうか。

ヨハネ福音書14:26 主イエスの言葉――

「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」

聖霊が「すべてのことを教え」ということは、聖霊の働きによって、例えば、ヨナ書2:1「ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた」や詩編16:11「(私は) 右の御手から永遠の喜びをいただきます」という章句がキリストの十字架と復活を指し示している(マタイ12:40)、と分かるということです。

今納得が行かないと言って自分のに閉じこもるのではなく、「今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」(ヨハネ13:7)とおっしゃられる主イエスに信頼を寄せることです。父なる神と共に主イエスご自身が、私たちに「息(霊)を吹きかけて」(ヨハネ20:22)、聖霊を与えてくださいます。このようにして、深く豊かな御言葉を理解することも、私たちが「主イエス・キリストを信じる」ことから始まるのだと分かります。

この説教のまとめとして、マグダラのマリアが朝、歩き出した時の情景を振り返ってみましょう。

ヨハネ福音書20:1――

週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。

「まだ暗いうちに」は単なる時の表示ではありません。その句は、原文に即して英訳すると、**while it was still in the dark (darkness)** となります。日本語ですと、「まだ暗闇の中に」、言葉を補えば、「まだどす黒いのような暗闇が支配している中を」となります。

まさにここで聖霊が私たちに「思い起こさせ」ようとしているのは、ヨハネ福音書の初めの「暗闇」(スコティア〔名詞〕ヨハネ福音書1:5、20:1、Iヨハネ1:5)と「光」ではないのでしょうか。

そこで、ヨハネ福音書1:5を注視するならば、「暗闇は光を理解しなかった」という句に先行して、「光は暗闇の中で輝いている」との勝利宣言がある、と教えられます。

ヨハネ福音書1章と20章が響き合っている、つまり、神の為された最も大いなる出来事の初め(受肉)と終わり(復活)が調和している、ということです。

マグダラのマリアがそうであってように、私たちもまた、「どす黒い塊のような暗闇」の支配から逃れ

るすべを持ち合わせていません。その「暗闇」とは、端的には人の「罪」を指しています。しかし、それは扱い難いことに、その時々において、死への恐怖、言い表せない不安、自己満足的な安心、そして、若い時のさまざまな挫折などのように、姿を変えて私たちに襲いかかって来ます。

「あの方はよみがえられました。」（マルコ福音書16:6 口語訳）

私たちの予想をはるかに超えるかたちで、神の光は照り輝きました。暗黒の強固な支配の中に、突如、主のよみがえりの光が輝いたのです。

ヨハネ福音書・冒頭、「光は暗闇の中で輝いている」という約束であり、また福音〈喜びの知らせ〉である言葉が、ほんとうの事となりました。

♪「ひかりに あゆめよ、さらば（それならば）」（讃美歌326番）、すべての事に神の右の御手が働きます。世の汚れも、谷間も、墓も恐れることはありません。

キリスト讃歌（ヨハネ1:1-18）は、礼拝の中で歌い続けるものです。歌いつつ、暗いうちに歩き始めたマグダラのマリアのように、起き上がって進みましょう。その道にこそ、主と出会い、そして、主と再会する永遠の喜びがあります。

茅ヶ崎香川教会月報

No. 431

2016年4月24日発行

編集発行：日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会

発行責任者：小河信一

編集責任者：鈴木隆二